

『抗日パルチザン参加者たちの回想記』読書会 vol. 2



第1回読書会(5月20日)では、「抗日パルチザン参加者たちの回想記」に記された1930～40年代朝鮮人民による抗日革命闘争の歴史について、また訳者・鈴木武さんが翻訳を始めた当時参加していた釜共闘の運動について確認しました。そのうえで、回想記を一読し感じたこと、今この場所にどのように役立てることができるか、参加者全員で意見交換しました。

今回第2回は、全264話からいくつかの回想記を取り上げ、具体的な描写に即して読み深めたいと思います。3人の報告者がそれぞれの関心に基づき報告、問題提起したあと、全員で討議を行います。

ともに読み考え、話し合しましょう。ご参加をお待ちしています。

テキスト 『翻訳と連帯 ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

(編訳者・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ)

※ここには『回想記』全264話から特選集として28話がおさめられています。特選集は電子版が、発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/> で無料公開され、閲覧・ダウンロード・印刷は自由です。右のQRコードを読み取れば、ウェブサイトへつながります。また、264話の全訳データは <https://onl.sc/jTbQ4RR> からダウンロードできます。



日時 **8月13日** 場所 **赤羽北区民センター(赤羽北ふれあい館)**
(日曜日) 午後1時15分～4時半 第1和室(椅子・座布団あり。アクトピア北赤羽六号館3階)
JR埼京線「北赤羽」駅赤羽口から徒歩1分、北区赤羽2-25-8

参加費 **ひとり500円**(要予約)

主催 前田年昭

予約・問合せ メール tmaeda1966516@gmail.com

電話 080-5075-6869(前田)



- 参加希望の方は事前にお申し込みください(電話・メール)。
- 当日は以下の予定で、報告者の問題提起および感想や意見の交流、討議を行います。対象話の()付数字は特選集の話数、その他は全訳データに入っているものです。
- あらかじめ対象話を読んできてください。電子版を読めない方はご相談ください。

報告1

13:30～14:00 田代ゆきさん(組版労働者)

(10) 明けてくる明日のために リ・ヨンスク

7巻16話〈トルチ〉に関する話 ファン・スニ

14:00～14:15 討議

(21) 熱い心臓 キム・リョンヨン

3巻14話 ウェンウグの人民 キム・チャリン

報告2

14:15～14:45 キム・ヨンイルさん(福祉労働者)

(6) 不屈の闘士 リム・チュンチュ

(20) 任務を遂行するまで チャン・サンリョン

14:45～15:00 討議

報告3

15:15～15:45 須田光照さん(労働運動家)

6巻15話 燃える復讐の一念で バク・ソンウ

9巻8話 我々はこのように武器をとった リ・ヨング

15:45～16:00 討議

16:00～16:30 総括討議

「朝鮮では花が満開でしょうね!」(略)天真爛漫で純朴なトムム! 傷つ
いた体で敵の不意の襲撃を受けたのに少しもあわてず、(略)困境と飢えに
打ち勝ちながら祖国の春を恋したっている——リム・チュンチュの回想

リ・ヨンスクの回想——私たちは奴らが踏みつけてだめにした
鍋やアルミの器を石で叩いて伸ばして食事の準備をした

実際革命家というのは特別な人間ではない。誰一人として母親の
胎内から革命家として生まれた人間はいない——リ・ヨングの回想

第一回読書会討議での発言より抜粋

抵抗、革命のエネルギーに感動

個人の英雄ではなく集団の戦いであることが重要

・初めて、日本の侵略に対する抵抗運動が革命運動だったことを知った。そのことにとても感動したのは事実でした。

・とにかく闘う人たちにはすごいエネルギーがあるんだなというところを、改めて思いましたね。飢えや寒さ、敵の攻撃にも犠牲を恐れずに、自分を犠牲にしてでも仲間を助けようという。敵に対する憎しみというようなことも、僕ら自身が日々労働運動でやっていること、日常経験してきていることだと思っ

て共通する。やっぱりつながっている。

・女性の同志、女性の革命兵士の献身的な戦い、これまでの話の中では民族差別や階級差別の問題もありますけども、性差別も戦いの中で乗り越えようとする姿とも読めて、それはすごくいいなと思った。

・寒さのあまり引き金がかつちいちゃって離れない、ああいうリアリティは本当に体験者じゃないと書けないことですね。

・ここに書いてあることが嘘だとは思わないし、非常に崇高な精神で戦っているということに関する感動と共感があります。ただもうちょっとプロレタリア国

際主義の観点があつてほしいなと。横村浩の間島パルチザンの歌にみられるような精神を少しは発揮してほしい。これが一番大事なことだと思うので。

・読むと、割と同一化してちょっと上がってくる感じがあるんですね。元気にはなりますね。最初はキムイルソンの、という

加害の歴史を背負って

闘う労働者の共通した思いを伝えている

・東アジアの近現代史を何も知ってこなかったことを最近すごく反省していて、勉強もまだ全然できていない、入り口に立っているところですが、勉強したいと思つて来ました。

・そうか、現場で現場監督みたいな人にわざわざ在日の人があてられて、それによってヘイトを構成してる。作ってるわけですね。なるほどと思つて。そういう手口は普通にあると思うんです。そういう中で苦勞されて、こういうものができて、私の頭の中ではまだつながってないんですけど、こういう翻訳に

うつながりなんだっていうのが、ようやく見えたくらいの感

より朝鮮労働党のテキストを読むというのは、えいやつて飛び越えるところが正直ある。でもここはやっぱり民衆、キムイルソンを含めた民衆の戦いというのをつかむことが大切なと思います。

・個人の、行動した人間が書いた評伝はおもしろいんですけど、この本は、個人の英雄的な戦いではなくて、集団的な戦いであるということがすごく重要なのではないかなと思いました。

じです。

・自分自身は抑圧民族の一員である。私もまったく同じ、日本で日本人の両親のもとに生まれて、日本で教育を受けてきた人間ですから、同じ立場でありたいのだけれど、義務教育も、日常的に社会に流布している情報の中でも、なかなかその自覚をもちにくいな、いつも思うんですよ。

・ひとつひとつ書かれてるエピソード自体、同志を背中に背負って絶対においていかないと

闘わなきゃいけないと思つてい

る、そういう非常に日常的なところともつながっているような

気もして。

・歴史的な設定とかアクターとその関係は、なじみがないんだけど、そういうところを外してみると非常に純粋な物語なんですよね。偏見がなければ、うん、と思えるので、偏見を持たないことも大事だし、歴史的な文脈を整理して理解できるようにすることも大事だなと思います。

・つぶされた鍋を、形をなおしてもう一回煮炊きを始める。そのたくましさは労働者のものだと思います。

・30年間の翻訳という「労働」は、受けて応えるという行為かなと思つて。それくらいけな

人間性ちゅうのかな、本当の人間になつてい

間になつてい

瞬間瞬間というのを寄せ場の運動でいっぱい経験してるんだと思

いますよね。そこをもちろん

加害の立場とかいろいろあるけれど、闘う労働者人民の共通した思いというところに重ね合

せて今の僕らに伝えようとしてくれているんじゃないかなという気はしますよね。